

La Informilo de NEC

センター通信

第266号

2012年3月12日発行

名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニール新栄301号
郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]
<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/>



磯部晶策さんを囲む会

名古屋エスペラントセンターでは、1月28日センター事務所で「磯部晶策さんを囲む会」を開いた。18名が出席。2時間の講演のあと夕食を挟んで親睦会を持った。磯部さんの若いころのエスペラントとの出会い、その後の活動について語ってくれた、幅広い話題で聞く者たちを魅了した、エスペラントの言語としての可能性、アイルランド民謡について、歌の翻訳、名古屋のエスペラント界についての見解、作品を歌ったバリトンCDのこと、著書のことも聞くことができた。記念品を贈り、記念写真を撮り遅くまで歓談できた。これは、2008年に三重県で開いた「阪直さんを囲む会」から2回目のベテラーノを囲む会である。



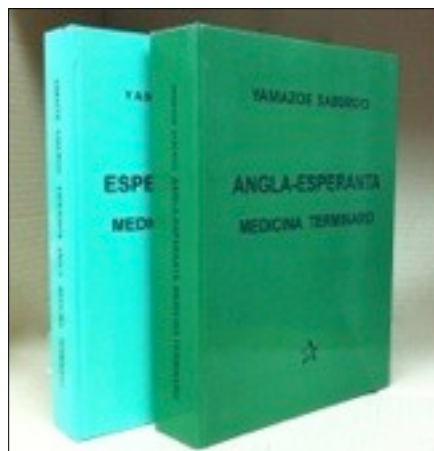
先日の磯部晃さんを囲む会は大変楽しい会でした。私に歌の素養がなく、山田さんのようには入りこむことは出来ませんでしたが、磯部さんの多分野にわたる経験をきくことができたのはうれしかったです。もっと時間があれば、食に関する話も聞きたかったのですが。 西尾

医学辞書の寄贈

磯部晃さんから名古屋エスペラントセンターに2冊**寄贈**がありました。山添三郎の「英語-エスペラント医語辞典」「エスペラント-英語医語辞典」。

山添三郎（1908-2007）は磯部さんの奥さんの叔父さんに当たる人だそうです。

Yamazoe Saburoo “Angla-Esperanta Medicina Terminaro” 2001, 720p
Yamazoe Saburoo “Esperanta-Angla Medicina Terminaro” UMEA Shinoda-Kuracejo
Kraków 2006 534p



NECの Zamehofa Festo 2011

センター主催の「ザメンホフ祭2011」は12月10日の土曜日午後、センター内で行われた。

メインには、八ヶ岳エスペラント館と歌集出版における働きが評価されて、本年度の小坂賞を受賞した山田義氏が、Kanto Bela, Vivo Stelaと題して話した。これは日韓合同エスペラント大会での受賞記念講演を再現したもの。

その後、海外の大会などの報告として、後藤好美「コペンハーゲン世界大会（95UK）参加報告」、片山浩子「ウーディネにおけるエスペランチストとの交流報告」、伊藤順子「ウズベキスタン、ネパール、イタリアにおけるエスペランチストとの交流報告」の三氏が、スライドを使って順に解説した。なお、磯部晶策氏からは、磯部塾主催で行われたディナーの様子を伝える海外エスペラントメディアの紹介があった。興味を引いたこととして、片山氏がエスペラントのクラブを訪れた際、宿帳に残された唯一の日本人として、伊藤栄蔵氏の手記を見つけたことだった。

そのまま、センター内で、有志による懇親会へと移行した。出席者による自己紹介、永瀬義勝氏によるこの地方出身の小坂賞の歴代受賞者の解説、猪飼吉計氏のアコーディオン演奏などがあった。参加総数は17名。



山口真一

名古屋エスペラントセンターの部屋を使用しているザメンホフ祭は、どことなく居心地が良い。本やら資料やらでスペースが埋まり、十数人が入るともう手狭ではあるが、むしろそのほうが賑やかしくて、「祭」にふさわしいのではないだろうか。ともかくも、こういう催しが少なくとも1年に1回はほしいところだ。

今回は、センター委員である山田義さんのお話がメインで、ふだんお付き合いさせていただいている方のお話をこうして拝聴できるのはうれしい。私は音楽の方面はまるでダメで専門的なことは分からないが、興味を引かれたのは、『君が代』のエスペラント訳詞に"verda"が使用されているというくだりであった。こうした一見些細と思われることに戦前のエスペラント運動の苦闘を垣間見た思いがした。

女性三人による世界旅行報告は、それぞれに面白く拝聴させていただいた。アジアにはアジアの、ヨーロッパにはヨーロッパの魅力がある。そんなことを再確認させていただいた。私も来年からは少し休みをとって、いろいろと出かけていければなあ、と思っている。

懇親会では全員のお話が聞けてよかった。私も買い出しに参加したが、食物・飲物はもう少し上等のものを選んでもよかったかも、と個人的には思う。みなさん、わたしももちろんだが、そろそろ量よりも質を重んじる年になってきたのでは... ☆

ザメンホフ祭に参加して

Zamehofa Festo 2011

片山浩子

「センター通信」2011年6月号に、イタリアのウディネでエスペ란ティストに会った
ときのことを書かせていただきました。今回ザメンホフ祭で、皆さんの前でお話する機会
を与えていただきましたので、たくさんの写真とともに、さらに詳しくご紹介することが
できました。

特に皆さんに興味を持っていただけたと思われる点を挙げますと、

- ①ザメンホフのモザイクがついた石碑ー私の後で発表された伊藤順子さんが、以前ご夫婦
でウディネを（エスペラントとは別に）訪れたことがあり、お城を散策している時この石
碑を発見されたそうです。懇親会でお聞きして、偶然の一致に驚きました。
- ②1960年にウディネを訪れた亀岡の伊藤栄蔵さんー「大本の伊藤さんですね。あの人も
ウディネにいたのですか」と何人もの方がおっしゃってくださり、記名ノートの写真を
撮ってきた甲斐がありました。
- ③現地の言葉フリウリ語ー小川博仁さんがザメンホフ祭の日に購入した本にフリウリ語に
ついての記述があったと、後日そのコピー等を私に送ってくださいました。これも嬉しい
偶然でした。

またこの機会を利用して、S-ro Rovere自主制作のエスペラント歌唱CDについても、
再度ご紹介させていただくことができました。ウディネで預かってきた10枚は、これで
すべて皆さんのお手元に渡りました。彼はこのCDの売り上げを、コンゴ（アフリカ）の目
の不自由な子どもたちへの支援団体に送っているということです。そのお手伝いが少しで
もできればと思い、皆さんにカンパをお願いしましたところ、多くの方が協力してくださ
いました。私の分も合わせて10,000円（年末のレートで換算して約100ユーロ）を先方に
送りましたので、この場を借りてご報告させていただきます。ありがとうございました。

20年以上名古屋に住んでいますが、センターを訪れたのはこれが初めてです。ぐるっと
見渡して、たくさんの貴重な資料、読んでみたい本や教材などがきれいに保管されていて
感心しました。日頃から管理運営してくださっている皆様に頭が下がります。今後も講習
会場やエスペ란ティストが集まる場所として、どんどん活用されていくといいですね。

Ni multe enmanigas per Esperanto rarajn kaj valorajn spertojn



Vespere la 24-an de januaro en Nagoja Esperanto-Centro prelegis d-ro Márkus Gábor, hungaro, kiu antaŭ 30 jaroj loĝis en Nagojo kaj studis en Nanzan- Universitato.

D-ro Márkus Gábor kaj Hideko

Ĉi-foje li veturis unue al Koreio por partopreni en Internacia esperanto- Renkontiĝo de Meditado, al kiu li estis invitita, kaj revenvoje li vizitis Japanion, kaj profitante tiun okazon, li decidis revidi Nagojon.

La temo de lia prelego estis “Esperanto kaj mi”. Pli ol dek homoj aŭskultis lin. Dum du horoj li parolis pri sia vivo kiel esperantisto. Pere de lia prelego mi eksciis, ke li tre amas Japanion kaj la esperantistojn, kiuj ege subtenis lin tiu-tempe. La vizito al Nagojo ŝajnas esti nostalgia vojaĝo pri liaj junaj tagoj. En Hungario la konstruaĵoj kaj stratoj ĉiam restas samaj, malgraŭ la granda ŝanĝiĝo politika kaj ekonomia dum la pasintaj 30 jaroj, sed en Nagojo ege ŝanĝiĝis intertempe la urba aspekto. Por trovi la lokon, kie li iam loĝis, li bezonis du horojn, malgraŭ ke li kunportis detalan mapon, li diris.

Antaŭ la unua vojaĝo al Japanio li vivis sub la komunisma reĝimo. En tiu situacio studi en aliaj landoj aŭ vojaĝi eksterlanden estis tre malfacile, sed post penaj klopodoj li sukcesis efektivigi sian revon veni al Japanio. En japanio li travivis nekredeblajn avantaĝajn spertojn, renkontis multajn esperantistojn, kiuj estis pretaj helpi lin, sed Esperanton li ne estis ellerninta en sia lando. Mirige survoje al Jokohamo per trajno kaj ŝipo dum du semajnoj li lernis nian lingvon kaj daŭrigis la lernadon plu en Japanio.

Unue li restis en Kioto mallonge, kaj poste li venis al Nagojo kiel stipendiulo de s-ro WASEDA Yutaka, estro de Entrepreno de “Verda Stelo”, kaj studis la japanan lingvon kaj kulturon en Nanzan-Universitato.

Kaj pli miriga estas la fakto, ke dank’al Esperanto kaj la spertoj akiritaj en Japanio, li faris, reveninte en sian hejmlandon, brilan karieron kiel altranga oficisto en la ŝtata petrol-organizo. Aŭskultinte lian prelegon, mi rimarkis kaj konkludis, ke Esperanto povas doni al ni diversajn trezorojn. Kvankam ni ne gajnas monon el Esperanto, ni multe enmanigas rarajn kaj valorajn spertojn, kiujn oni ne povas aĉeti.

Post la prelego ni vespermanĝis kune en najbara restoracio. Estis tre kontentiga vespero por mi. Dankon al ĉiuj, kiuj aranĝis la preleg-vesperon !

Hideko



猪飼吉計

1982年の一年間エスペラントのつてにより南山大学に留学したハンガリーのマルクシュ・ガーボル氏。今は年金生活者となった彼が、今回、30年ぶりに当時と同様に陸路と海路で名古屋の地にたどり着いたのは、寒風吹きすさぶ1月20日のことだった。しかし、名古屋駅に降り立った彼が目にしたのは、彼の思い出の中の名古屋ではなく、大きく変貌を遂げた高層ビルが立ち並ぶ名古屋だった。

小脇には一冊の著書があった。タイトルはRuĝa Suno kaj Verda Stelo。その表紙を飾るのは、南山大学の正門に立つ若き日の彼の姿だった。今回来日したのは、母校である南山大学を訪れ、この本を寄贈するためだったのである。

その四日後、やはり当時と場所も広さも変わった名古屋エスペラントセンターには、マルクシュ氏の、Esperanto kaj Mi と題する講演を聞くために11名が結集した。通訳は猪飼吉計が勤めた。

共産圏のハンガリーでは外国渡航はきびしく制限されており、マルクシュ氏が留学できたのも、今は亡き早稲田裕氏の緑星企業の奨学金によってだった。シベリア横断鉄道の二週間の長旅の中で、独習書をたよりにわかエスペランチストとなって日本に到着。すぐに現地のエスペランチストの輪にとけ込み、民際交流をしながら草の根的に日本の文化や経済についての勉強をし、充実した学園生活を送ることが出来たのだった。

帰国したのちは、共産圏ハンガリーでは、自由主義圏の日本の文化や経済事情を知る貴重な情報通として重用され、政府関連の重職を担うまでになった。いわば、エスペラントが彼のキャリアの礎を築いたことになる。

エスペラントに対する感謝に満ちた彼の講演を聴いた一同は、彼が南山大学を著書の表紙に選んだその理由を、ようやく理解したのだった。

そして、さらに三日後の1月27日、マルクシュ氏は、30年ぶりに母校の正門をくぐった。そして、学長室に通されると、現学長カルマノ氏と歓談し、彼に著書を手渡した。今回の来訪の目的が果たされた瞬間だった。



2012年1月27日午後3時、マールクシュ・ガーボル氏はかつて学んだ南山大学を訪れ、学長ミカエル・カルマーノ氏と30分にわたって歓談しました。

その折の記念写真。右より猪飼、学長、マールクシュ・ガーボル、森田の順。

学長が手にしているのはマールクシュ氏の著作『Ruĝa suno kaj verda stelo』。なお学長のご母堂もエスペラントを学んだことがある由。(写真と文・森田明)

La 61a Esperanta kongreso de Tokaj

東海大会第一報

日時： 2012.5.27 (日) 10:00～17:00

場所： 豊橋市民センターカリオンビル (予定) (豊橋駅から600m, 徒歩7分)

内容： 講演、各大会報告、歌唱指導、本の紹介等

担当者を募集中。

懇親会予定

内容は検討中です。担当可能な方は申出願います。

豊橋エスペラント会

中山欣司

qinsi46@hotmail.com

http://www.jei.or.jp/hp/gyozi_2012.htm#2012Tokai





点字板でメモを取りながら話をする富田伴七（1931-2011）さん。
2003年Cambro Carmaで。

富田伴七（とみた・ばんひち）さんが年末に亡くなった。80歳。生まれは1931年常滑市。Cambro Carmaの勉強会に出席していたころ、熱田区にある施設、アウラ神宮南に入りそこで晩年を過ごした。名古屋エスperant会を2006年から引き受け、時々お見舞いを受けており、話していても直ぐ苦しくなって酸素吸入器が必要になったようだ。でも、果物が好きで、一口二口と楽しんでいたという。月1回のCambro Carmaの勉強会の仲間もみんなで施設を尋ねたこともある。

名古屋盲学校在籍中16歳のころ授業で、教師で名古屋の盲人エスperanティスト片岡好亀さんからエスperantの話聞き、同志社大学在学中に小坂狷二『エスperant捷径』で独習した。名古屋エスperant会では、片岡さんや丹羽正久さんらと名古屋で会合に出ていた（1960年代）。2003年NESが行った福祉大学での東海大会にも参加した。2007年の東海大会で名古屋エスperantセンターに入会。日本盲人エスperant協会、エスperantを広める会等の会員であった。第72回国際盲人エスperant大会（2006年・フィレンツェ）に参加した。名古屋盲学校の先生を勤め、愛知視覚障害者協議会会長として活躍、名古屋ライトハウスの第2回（2007年）文化活動特別賞も受賞している。

【松山の田元美紀さんから】愛知のエスperanティスト、富田伴七先生が昨年12月19日に亡くなられたことを知り、私も大変惜しく思いました。富田先生には、2006年の岡山での日本大会で初めてお会いしました。翌07年の横浜での世界大会の時にも、同じ宿舎に泊まり、同じ会場でバンケードを楽しみました。今でもそのことが忘れられません。富田先生のご冥福をお祈りいたします。

人間の命を考えさせた本

比嘉康文著『我が身は炎となりて』新星出版 2012年

書評 山田寛人



本書は、由比忠之進というエスペランティストが、当時の日本の政治に対して抗議して焼身自殺をした1967年11月11日の事件をとおして、由比忠之進という人物像、その背景にあった日本の歴史とエスペラントの思想、遺族の思いなどをていねいな取材にもとづいて描き出したものです。本書評は客観的な視点からではなく私個人がどのようにしてこの本に引き込まれていったのかという視点から書かれているという点をあらかじめお断りしておきます。

『我が身は炎となりて－佐藤首相に焼身抗議した由比忠之進とその時代』というタイトルを見ても特に興味がひかれたわけではありませんでしたが、この本を読み始めてすぐに引き込まれていきました。

まず、冒頭に記された1967年11月11日という焼身自殺の日付を見て引き込まれました。私は1967年9月23日生まれです。人は生まれた直後の時代については後で勉強しなおさない限りは何もわかりません。この本では、ベトナム戦争、安保闘争、沖縄返還という事件が取り上げられていますが、こうした事件名は、私のような後の時代の者にとっては年表に出てくる単なる項目に過ぎません。

しかし、この本の第一部では、焼身自殺という事件を中心に当時の日本社会の雰囲気が生々しく伝えられていて、まるでその時代を生活しながら当時の新聞を読んでいるような臨場感を与えてくれます。つまらない歴史の概説のようなものに慣れている人にとっては刺激的で、興味深い記述になっていると思います。第二部では、由比忠之進が生まれた1894年以降日本が周辺のアジア諸地域を支配していった歴史が、やはり由比忠之進という人物の経歴を中心において生き生きと描かれています。

次に引き込まれたのは、第二部に出てくる名古屋でのエスペラント運動に関する記述です。私自身が名古屋で生まれ育ちエスペラントを学んだということもあり、興味深く読むことができました。1927年9月に日本初のエスペラントのラジオ講座が行われたのが名古屋で、ラジオテキストの売り上げ部数が英・仏・独語よりもはるかに多かったということは、本書を読んで初めて知りました。

また、エスペラントが取り締まりの対象になっていて警察官もエスペラントを学んでいたという話は、やはり日本人警察官が植民地支配を円滑に進めるために朝鮮語を学んでいたという歴史とも重なって興味深いものでした。そうした目的でエスペラントを学ぼうとしていた警察官にエスペラントを教えていた由比さんの人の好さと、現実の恐ろしさがよく伝わってきました。この記述を読んで、私が学生時代に妹が警察官の試験を受けて一次試験だか二次試験に通った後に、私が住んでいたアパートの部屋に警察官がやってきて本棚に並んでいたエスペラントの本を見て「エスペラントですか・・・」と言っていたことを思い出しました。

エスペラントは由比さんの焼身自殺の思想的背景のひとつだったようですが、エスペラントと言えば言語であり言語と言えば道具であると思っている人にとってエスペラントの思想というものは理解しがたいかもしれません。たしかに、エスペラントの思想などとは無関係に、道具として外国人との交流を純粋に楽しむという人も少なくありません。逆に、エスペラントの思想には共感しても道具としてのエスペラントを使いこなせないという人もいます。由比さんはどちらの面に対しても情熱を注いで、実際にも行動していたという点で貴重な人物だったということがこの本を通してよく理解できました。

最後に、焼身自殺という抗議の方法に対する評価についてですが、それを称賛するようなものであれば、読む気が失せていたかもしれません。しかし、この本ではそれについて多面的な調査をつうじて客観的にえがかれていたので、焼身自殺という事件そのものに対して自分なりに自由に考えることができました。とくに、遺族の方々へのインタビュー内容は非常に興味深かったです。当時の社会的評価と、遺族の方々の心情とのちがいというものが、人間の命を考えるうえで重要な問題だということに改めて気づかされました。

19世紀末から1960年代までの日本の近現代史、1960年代までの日本のエスペラント運動の雰囲気、焼身自殺に対する評価という問題について大いに刺激を受けた一冊でした。★



2007年11月、比嘉康文さんを名古屋エスぺラントセンターの事務所に案内した【写真】。由比忠之進が名古屋にいたころのことを取材するためだ。竹中収集のNHKラジオ講座のポスターや写真、機関紙などをお見せした。私が20歳のころ初めて参加した富山の日本大会には由比さんといっしょだったり名古屋の例会などで会ってはいたが、比嘉さんの取材に役立つような話もできなかった。聞くと私と同じ年齢で、沖縄の宜野湾市に住む新聞記者だとのことだった。由比さんのことでは情熱を持って取材にあたっていた。

長年の準備の末、このほどこの本を上梓され心から喜んでいる。この本では、焼身自殺した由比忠之進さんの生涯を書いているが、日本のエスぺラント運動の歴史を生き生きと示してくれた。内部の者の目からではなくジャーリストとして扱っているのが当時の名古屋のエスぺラントの働きも公正な目で読み取れる。

由比さんが名古屋で家族から離れて暮らしていたころ、私の父は音信不通で、東京あたりに暮らしていたらしい。今この本の巻末にある由比さんの年表をみると、由比さんは父より10歳も年上だったのだ。「由比さんの家族は横浜に住んでおられるだよ」と先輩から聞いており、ご家族の苦労を同情したことを覚えている。

名古屋エスぺラント会の例会は毎週金曜日に竹中さん、丹羽さん、由比さんなどが熱心に集まっており、ベトナムからエスぺラントの本が新しく出ると由比さんが持って来ている。若いころはその場にいながら私はこの地方のエスぺランティスト事情を把握もしようとしなかったが、こうして比嘉さんが書いた本で、若いころ自分のいた状況を振り返っている。自分の若いころの位置は今や歴史の中にある。その歴史はひとりの人物を通して蘇り現実の今へと結びつけている。

由比さんの行為を思いつつ、使徒パウロがコリントに住む信者に送った書簡から、有名な愛の賛歌の1節を記しておく。Se mi lasus mian korpon por forbrulo, sed ne havus amon, per tio mi neniom profitus. I Korintanoj 13:3 (私のからだを燃え尽きることに引き渡そうとも、愛を持たないなら、そのことで私はどれほどの益も得ない。)★



ベルギーから休暇で日本に来た Alex Humet さんは各地を回り、2月26日金沢の川西さんのところから名古屋に。スーツケース二個とナップサック一個の大荷物と190cmの背丈を目印に猪飼と山田で迎えました。センターへ向かう途中名古屋城や布池のカテドラルを見学、センターでは夕食をともにしながら11名に自分のエスペラント歴など明瞭なエスペラントで語りました。翌日は私立の高等学校の美術科で、スペインにあるガウディ設計のサグラダファミリア聖堂について、猪飼吉計の通訳で講演をしました。蟹江町で2泊。そして次の訪問先山梨県へ。3月4日には帰国の予定。

2月13日の委員会で、今年の総会の日程が決まりました。
お集まりください 名古屋エスペラントセンター委員長
日時：2012年3月24日（土）16時～
場所：名古屋エスペラントセンター

編集後記 山田義

今年はエスペラント発表125周年です。トップページにそのemblemを掲げました。省みてセンターの jubileo はいつ頃かかなと、ホームページを開いてみたら、「1973年エスペラントの部屋誕生、1974年エスペラントセンター発足」と記載があり来年あたりが40周年記念の年になりそうです。

センターの室内の管理については、本棚を増設、白板設置を工夫して部屋を整頓していきたい。11月から始まった講習会では中級へと進み二人の講習生も熱心に勉強しています。

100部発行（内、メールでPDF発送は約20部）ホームページの[通信より]に順次アップの予定。